

# 11

## 人間とは何か？ 言語化できないことの可視化

What is man?

Visualization of what cannot become a verbalizing

映像メディア学科・助手

Department of Visual Media・Research Associate

横山 達也 Tatsuya YOKOYAMA

## はじめに

本稿は、2012年10月10日(水)から10月21日(日)までアートラボあいち4FGakugei Lab.にて行ってきた個展『横山達也写真展“肖像写真たち”肖像写真における人間とは何か?』においての研究活動報告書である。今回の展覧会は以前から著者が行なってきた研究「肖像写真を通しての人間研究」の新たな発展と展開の試みを実験的行ったものである。1章では著者の研究における考え、2章では制作のプロセス、3章では展示にあたっての解説を行っていく。

## 1 肖像写真を介して人を知る

### 1.1 人との関わり

兼ねてからの研究「人間とは何か?」そのことについて肖像写真を通して人間研究を行なっている。そして人間とは何かということにおいて言葉で表現したり、言葉で伝えるよりも肖像写真という形で表現し伝える方が理解しやすく、説得しやすいと考えた。

肖像写真はそこに写し出されている被写体が存在したことや本人であるための確認として扱われる。そのため人々は肖像写真からは被写体があたかも今ここに存在しているかのようにその被写体の存在を感じることもある。しかしそれだけでなく、写し出されている被写体の体系や服装や髪型、写された場所との関係性などから被写体の日常生活や風貌や性格などうかがうことができるが、人間性などの言葉にすることのできないことや目には見えないことまでうかがうこともできる。さらに肖像写真は鏡で見る姿(虚像)とは違い、他者からの視点(実像)で見ることができる。そして人間とは何か?ということにおいては一言では語るができないほど謎めいているため、肖像写真を介すことによって普段見ることのできない部分や言葉だけでは伝えきれない部分を垣間見ることができる。しかし、ただただ肖像写真を撮るだけでは単なる記録や記念写真にしかならず、それではその肖像写真からは何も伝わらず考察することもできない。それを解決するにあたり撮影者と被写体との関係性が密接でなければならない。

普段は無意識のうちにやっていることを意識的行わせ、確認させることによって考えるということができる。それによって肖像写真から他者のことを考えるということにつながり、人々に他人のことを考えたり思ったりすることを養わせる。

### 1.2 見ると見られるの関係

肖像写真はカメラという道具を用いて撮影する人(カメラマン)と撮影される人(被写体)との関係によって成り立っている。撮影者はカメラのファインダーを通して撮ることを意識的に行い、被写体

はカメラのレンズによって撮られることを意識的にさせられる。そしてカメラを介してお互いの存在について意識し、認識し合いながら撮影という行為を行い、その瞬間お互いの時間と空間が共有され、シャッターが押された一瞬、撮影者と被写体が一気に結ばれる。それによって、そこで言葉のない対話がなされ、その肖像写真には被写体の意思が存在する。

被写体は撮影の際に写し出される自己像について想像しながら自己の存在について考える。そういった肖像写真には被写体の意思が存在しており、誰かに見られることを想定している。それは肖像写真として出来上がったときにそれが被写体の意思とは関係なく誰かに見られることを想定しているからである。そしてそこにも写真を見る人と写真に写し出されている人が見られるという「見る」と「見られる」の関係性も生まれる。そのことから肖像写真には「撮る側」と「撮られる側」の関係にありながら、「見る側」と「見られる側」の関係にもあることがわかる。

肖像写真は人と人との関わりの中で撮影が行われることによって人々の意識に変革を与えることができる。そのためそこには言葉にすることのできないことや目には見えないことまで写し出されてくる。

### 1.3 カメラによって与えられるもの

人々の意識に変革を与え、言葉では伝えることのできないことを表現していくには、人間の記憶はあまりにも主観的な曖昧さがあり、人間の目もまた主観的な曖昧さがある。カメラは真実を客観的に記録して、客観的な視点で見せてくれる。そのため肖像写真には視覚による差異もなく全てを平等に写し出すため、普段意識して見ていなかった無意識的な部分まで写し出されるのであり、気づかないで見ていなかった部分を見る事ができる。それは我々が普段鏡で見て自分の顔とは明らかな違いが存在している。また、我々はカメラの前に立つとどうしても何者かを演じようとしてしまい、偽ろうとしてしまう。それは、カメラという物に対しての人々の認識であり、写真に撮られるということはその後誰かに見られたり見せたりする物であるという認識があるからである。その認識があるため被写体になった人は誰かに見られるということを意識してしまい、無意識のうちに自分を偽ろうとしてしまう。それを排除するにあたり撮影において被写体の表情を無表情にすることによって偽りの部分は排除することができる。そうすることによって、我々は被写体すら知らないその人の現実の顔を写し出すことができ、自らの知らなかった部分について知ることができるのである。このことについては日常生活の上では自らを客観的な視点で見ることができないため確認することはできない。それを言葉で表すよりも肖像写真によって表現させることのほうがより説得力があり、理解しやすいのである。

## 2 肖像写真の制作

### 2.1 群衆として構成された肖像写真

写真1のように肖像写真をたくさんまとめて群衆のように見せることによって、それらを全て平等化した中で肖像写真を比べて考えさせる作品形式で行ってきた。それは見るだけでなく考えるという行為を鑑賞者に行わせることを目的としていた。そして群衆で見せることによって同時に多数の視線を感じることができ、常に見られている状態を意識的にさせることはできた。

しかし今回の展示で行っていたスタイルがパターン化してきていることがわかり、フォーマット化してきていることに気がついた。パターン化してしまうとその被写体の人とのコミュニケーションやその被写体との距離感が伝わりにくくなり、それにより記録という面が強くなり、その時そこにその人が存在したという記録をただけにすぎないように感じだした。そして撮影を重ねて行くにつれて被写体を捉える構図が無意識のうちに自らの中でフォーマット化されてきた。さらに群衆で見せようと一枚の写真を見るのではなく、全体を眺めるように見てしまうがために全てが平等化してしまう。全てを平等化してしまうと一枚一枚の個としての個性という面を考察するということが難しくなることがわかった。そのため研究の「人間とは何か？」ということを知る上での情報が薄れているように見えてしまい、読み取りにくくなることがわかった。



写真1:『“肖像写真たち”肖像写真における人間とは何か?』展示風景／2012

### 2.2 二人での肖像写真

新たな試みとして写真2の何らかの関係をもった二人を一つのフレームに納め、そこから二人だけの二人から感じる人間とは何か?を考察した。被写体として選んだ二人は何らかのつながりや関係性をもった人を選んだ。それによって鑑賞者は写し出されている二人の関係性について考察を行い、そこに共通点を見つけようとする。例えば夫婦であったり、兄弟であったり、友達同士であったりと身近な関係にある人を一緒に撮影した。そこから夫婦なら夫婦の、友達なら友達の言葉では表現することのできない二人だけの環境や空気感が現れてきた。しかしながら考察という面



において写し出されている二人の考察で留まってしまい、他との比較ということについては難しかった。



写真2:二人での肖像写真／2012

## 2.3 家族での肖像写真果

二人での肖像写真に加えて、家族という集団での撮影も試みた。家族での肖像写真は、その家族としての固まりで見ることができ、そこから家族構成や家庭生活が垣間見ることができ、その家族独特の存在感を感じることができた。人間を個としてみるだけではなく家族という集団で捉えたとその分「人間とはなにか」ということをさらに強く訴えかけてくるように感じられるのではないかと思います。しかし今回は人間とは何かということよりも家族としての構成や関係性の方が強く感じられた。



写真3:家族での肖像写真／2012

## 2.4 全身での肖像写真

全身の肖像写真となるとその被写体の立ち振る舞いを伺うことができ、顔の表情に焦点がいくよりか、体全体として被写体を捉えるようになる。そのことにより被写体の動作であったり、体系であったり、服装であったりと人の表面的な部分の情報を気にするようになる。そのため全身の肖像写真は普段日常生活の中で見る他者のイメージに近い。そして場(背景)との関係性においても強調される。しかしこれらのことは被写体の表面的な部分であり、内面的な部分、例えば性格であったり、感情であったりという面においてはここから考察するとなると、写真1のような一人の肖像に比べると難しい。



写真4:全身での肖像写真／2012

## 3 個展“肖像写真たち”について

### 3.1 展覧会情報

『“肖像写真たち”肖像写真における人間とは何か?』

日時:10月10日(水)ー21日(日) ※月・火は休館

11:00ー19:00(最終日は15:00まで)

会場:アートラボあいち4F Gakugei Lab.

今回の展示は肖像写真と鑑賞者が同じ時間、同じ空間を共に共有し、この場で対話をおこなってもらうことを目的として行なった。現代社会で他者との関わりが希薄化されていると感じた。そして日常生活において我々は他者と向き合うことが少ない。そんな時代の中で今回の展示会場は他者について考える場となった。

## 3.2 作品情報

作品数:合計45点

・額装作品/40点 サイズ:508×610mm ブックマット形式

[1]一人での肖像写真/銀塩写真/26点

[2]二人での肖像写真/銀塩写真/8点

[3]家族での肖像写真/銀塩写真/2点

[4]全身での肖像写真/銀塩写真/4点

・パネル加工のアルミフレーム作品/5点 サイズ:1030×1456mm

[1]全身での肖像写真/インクジェットプリント/4点

[2]人の皮膚のクローズアップ写真/インクジェットプリント/1点

## 3.3 展示構成

今回の展示は大きく分けて3つの構成にわかれており、人々が他者との関わりの中で自身と向き合うきっかけを与えてくれるための空間として構成。第1が前回と同じように一人の肖像写真を群衆としてみせる展示レイアウト、第2は新たに写真2と写真3と写真4のフォーマットで撮影された肖像写真、第3にB0サイズの全身の肖像写真によって構成されている。第1の構成は新たに今回構成された第2と第3の構成とを比較する対象として展示。第2の構成は新たな試みで撮影された肖像写真を前回までの第1の構成と比較するために同じ仕上げにした。第3の構成は展示作品のサイズを大きくして鑑賞者が対話を行いやすいように写真7のようにそれぞれの作品の前に観賞用のイスを設置した。この大きくプリントされた肖像写真は、被写体の存在を強く感じられ、あたかも目の前に被写体が存在しているかのように感じられ、強い視線も感じられた。

## 4 最後に

今回行った個展『“肖像写真たち”肖像写真における人間とは何か?』は肖像写真を介して被写体の視線を強く感じさせることができ、被写体の存在感を感じさせることができた。そして鑑賞者はこの空間で被写体からの視線を感じながら言葉のない対話が行なえる場となり、考えさせるという行為が生まれた。

肖像写真は一枚のフレームの中に複数の被写体をおさめると記念写真という要素が非常に強くなるため、そことの差異を重視しながら制作を行なうことが重要となることがわかった。

今後の展開としては被写体の存在感を強めていくために個としての存在を強められる展開で撮影、展示を行なっていきたい。そして「人間とは何か?」を知るにあたり言語化できないことを可視化していく作業はまだ探求する余地がある。

## 謝辞

最後になってしまいましたが、制作にあたり、ご協力いただいた皆様に、お礼申し上げます。



写真5:『“肖像写真たち”肖像写真における人間とは何か?』展示風景／2012



写真6:『“肖像写真たち”肖像写真における人間とは何か?』展示風景／2012



写真7:『“肖像写真たち”肖像写真における人間とは何か?』展示風景／2012